

夫の呪詛をかわす子供たちの悪い幼名

前回、キプシギスの父系社会の中で時に女性が置かれる微妙な構造的立場が窺える名前を分析した。ただ、それらも、氏族外婚を通じた氏族の政治的連帯とそれによる民族社会の統合という、まだ類型性の強い次元に関わるものだった。実際の生活の諸場面にもう一步踏み込んでこのテーマを追ってみる必要があるだろう。

■不幸な結婚と夫の呪詛

今から70年ほど前の事である。Kamarsek氏族の男性Kiprono Masitoni arap Bargalietと彼の最初の妻Chebo Soulelとの間に生まれるのは娘だけ。しかも皆夭逝した。つまり、Chebo Soulelの「(生命の)火」(mat)が弱かったのだ。当時、年の若い妻をもう一人貰うのがこうした場合の常套的な対処法だった。なぜなら、その若い妻が息子を産んでくれるばかりでなく、年上の妻の勢いの弱い「火」も蘇らせると信じられていたからである。Masitoniは、遙かに年下のTapranyeを2番目の妻に迎えた。事実、その直後から、Chebo Soulelが次々に男児を4人も出産し、更にその間に3人の娘も産んだ。しかも、その全員が無事生き延びた。長老たちの予測通り、彼女の「火」が蘇ったのである。

一方、年嵩の男性に嫁いだ上に、僚妻がすぐに妊娠して男児を産んだのだから、Tapranyeは面白くなかった。彼女はよそで夫のMasitoniに言及する時には決して名前では呼ばず、何時でもTuisern（「鼻黒」）と呼んで蔑んだ。間もなく事が露顕すると、夫はTapranyeを呪詛した。女性の最大の不幸は子供が無い事だとされたから、Tapranyeが不妊になるか、産んだ子供が皆若死せよと呪詛するのが最も痛烈な復讐となる。しかし、仮にも妻である以上、Tapranyeには自分の「火」を伝えて貰わなければならない。そこ

でMasitoniは、最少限の子供しか産めないようにと呪ったのだと伝えられている。

Tapranyeは、結婚後3年間、子供を身籠もる事が全くなかった。それから息子を1人産み、暫くして娘を1人産んだ。結局、その2人が彼女が生涯に得た子供の総てだった。

■子供たちの酷い名前

Tapranyeは、この2人の子供に、キプシギスの見方からしても実に奇妙な幼名を付けた。息子はKiplatuk、娘はChepyaといった。

Kiplatukは文字通りには「牛たち」(tuga)を「去勢」(lat)する「男」(Kip-)という意味になる。だが、真の意味は違う。例えば、捕虜として他民族から連行されて帰化させられた者をむき出して「帰化させられた者」と呼ぶのは不敬だとして、「敵を次々に帰化させた者」(Chelule)と呼ぶ。Kiplatukの名前は、これと同じ婉曲語法に基づいている。即ち、真意は「去勢された男」なのだ。昔なら、家に引き籠もって他民族の牛の略奪に出掛けない男。今なら、一日中酒を飲んで働かず、日中から放歌して歩く類の甲斐性なしの酔っぱらい。それがKiplatukである。彼女は、男として最も不名誉なこの渾名を一人息子の幼名にしたのだった。

他方、一人娘に付けたChepyaという名前は、「悪い」(ya)「娘」(Chep-)を意味する。Tapranyeが子供たちにこのような酷い名前を与えたのは、そうすれば夫の呪詛を逸らす事ができるという民族的な信仰のゆえである。しかも、Kiplatukは、Cheruという幼名をもう一つ別れていた。Cheruとは「眠っている」(ru)「奴」(Che-)、つまりウスノロの事である。

■印付きの者の名前

ところで私は、連載5回目の記事で、キプシギスの「印付きの者」という概念と、「印付きの者」が貰う特殊な名前を報告した。KiplatukもChepyaも「印付きの者」だった。そこで、この機会にもう少し詳しい報告をしておきたい。

「印付きの者」にされるのは、兄弟姉妹が連続死した後に生まれた赤ん坊である。親は「土豚の子」、「穴の子」、「拾い子」、「捨て子」、「土芥の子」、「飼葉桶の子」、「猿の子」、「人ならず」など、死・埋葬・不在を暗示する定型的な名前を、実際に実施した儀礼行為の種類に応じて子供に付けた。そして、犬、獣、猛獣などと印付きにした子供に呼びかけたり、言及したりして、まるで自分には子供がないかのように振る舞ったのである。

実は、この他に、Kiplatuk兄妹のような一人息子・一人娘も「印付きの者」にされた。一人息子には「女子イニシエイトたちの子供」(Cheptorus)、一人娘には「男子隔離小屋の子供」で(Chemenjo)という類型的な名前を付けた。前者の儀礼では、道端に置き去りにされた赤ん坊がイニシエーション受礼中の娘たちに一旦拾われ、後ほど母親のもとに返された。後者なら、イニシエーション受礼中の少年たちの隔離小屋に赤ん坊が暫く置き去りにされた。つまり、子供を産めない者であるイニシエイトの子供にあえて見立てる事で、存在しない者という社会的な位置づけを象徴的にその赤ん坊に与えたのである。

これらは、いずれも神への助命嘆願の儀礼である「何かする事」(yaiwet) 儀礼のヴァージョンだ。「印付きの者」は皆耳朶に特殊な矢傷を付けられると共に、それぞれの「何かする事」儀礼に特徴的な様々な装身具を身に着けた。こうして「印付け」された者には、社会の誰もが特別の配慮と保護を与えたのである。

Tapranyeは、子供たちを型通りに「印付きの者」にするだけでは飽き足らず、更に他に類例のない酷薄で侮蔑的な幼名を付けて、子供たちの命を確保しようと試みたのである。

■名前と人生の読み方

Tapranyeは、一方では、不妊に対して実際的に対処しようとしていた。自分の「火」が弱いのはting'oeokという病のせいだとも考えて、薬草の知識をもつ女性(chepkerichot)や女性占い師(chepsageiyot)を方々に訪ね歩き、様々な治療を受けた。そして、何時の間にか薬草や占いの豊かな知識を蓄え、やがて彼女自身も占い師となったのである。

TapranyeがKiplatukと共に住んでいた住居に程近いリテインは、AIC(African Inland Church)の手でキプシギス最初のキリスト教会が建てられた町である。晩年疎外感に囚われていたTapranyeは、1987年にAICに改宗し、女性占い師の秘密を告白した。女性占い師は、患者が沐浴した水を土器の壺の中で煮て、湯の中から誰かが邪術で患者の身体に埋め込んだ骨片や石片などを取り出した。実は、予め壺の内側に蠟で固定しておくのである。これは、患者を圧倒して信用させるトリックだが、病因と効果的な薬草の処方はずが夫方の祖霊たちが教えてくれるのだと彼女は語っていた。1998年2月病没。

さて、彼女は夫の呪詛を免れ得たのだろうか。Kiplatukは1993年、偶然、或る殺人事件の犠牲者の遺体第一発見者となった。この時以来事件の惨状が脳裏を離れず、1995年、その遺体から逃れるとって放浪中に父方イトコの家の藪で首を括って死んだ。Chepyaは、かつて女占い師になれという母親の願いを退けて以来、祖霊に首を締められる夢に苦しめられ続けた。彼女は、1998年8月、父親Masitoniや兄Kiplatukなどの名前を繰返し叫びながら、喉頭ガンで没した。これらの霊たちは、彼女が母親の後を継いで占いをし、また伝統的なビールを醸して供えるように命じていた。そう、人々はいう。

人々によるTapranyeの生涯の解釈は、彼女の不幸な前半生に大きく依拠している。彼女の2人の子供の奇妙で酷薄な幼名はそれを凝縮した表象となり、絶えず人々の見方に働きかけ、それを方向付けて来たといえるだろう。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)